中公文庫

洋菓子店アルセーヌⅡ

裏稼業のあとは甘いデザートで

九条菜月

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

プロローグ　7
第一話　ミルフィーユと折り鶴　22
第二話　縫いあわせのシフォンケーキ　105
第三話　ウエディングケーキは祝福の味　150
エピローグ　267

人物紹介

- 浅葉陽咲……失恋の傷を癒やしてくれたおいしいケーキに感動して「アルセーヌ」に転職。接客と広報を担当している。裏稼業に偶然気づいたことで、巻き込まれることになった。
- 一条大空…「アルセーヌ」のオーナー兼パティシエ。かなりの美形だがお客の前には一切出ない。裏稼業の際のリーダー役。
- 近藤哲志……焼き菓子担当のパティシエ。前職は要人警護官だった。大空たちのことを常に心配して支える。
- 来栖結……陽咲と同じ接客担当の男子高校生。可愛いものが好きで店では女装している。裏稼業では情報収集を担当。

洋菓子店アルセーヌⅡ

裏稼業のあとは甘いデザートで

プロローグ

ガラス張りのドアにかけられた『ＣＬＯＳＥＤ』の看板を『ＯＰＥＮ』になおした浅葉陽咲は、店先にゴミや落ち葉がないことを確認してドアを閉めた。朝方から降り続いていた雨は、いつのまにかあがったらしい。濡れた路面もじょじょに乾きはじめている。

二月も中旬。日中の気温は十度前後を行き来しているが、それでも日差しがあるぶんには暖かさを感じられるようになってきた。洋菓子店の右隣に位置する花屋も、冬のはじめからくらべれば店頭に並ぶ商品の種類も増えたように感じられる。

「あー、暖かい」

暖房の入った店内はまさに極楽だ。少しのあいだだからと、コートも着ずに制服姿のまま外にでていたので、全身を包み込むような暖かさに思わず溜息が漏れる。掛け時計を確認すると、時計の針は開店時間の十一時を指していた。

気持ちよくお客様を迎えられるよう、ショーケースの奥に立って背筋をピンとのば

す。とはいえ、陽咲が働く洋菓子店アルセーヌは、開店と同時に客が殺到するほど有名な店ではない。とくに午前中はひまで、本格的に忙しくなるのは午前十二時をすぎてからだ。

しかし、だからといって椅子に座って休憩しているわけにはいかない。なかなか開かないドアから視線をはずし、陽咲は手持ちぶさたにショーケースを覗き込んだ。

そこには魅惑の世界が広がっていた。

定番のイチゴショートをはじめ、ベルベットのような艶のあるチョコレートケーキ、宝石のような果物に彩られたフルーツタルト。美しい曲線を描いた和栗のモンブランに、薄い生地が何層にも重なったクレープ・オ・フリュイなどなど。もちろん、すべて売り物ではあるが、見ているだけでも幸せな気持ちになれる。様々な種類のケーキがショーケースぎっしりに並ぶ光景が見られるのは、この時間帯だけの特典だ。

「何時間でも眺めていられる……」

洋菓子店アルセーヌに勤務してはや五ヶ月。三十歳を間近に転職するはめになったときはどうなることかと思ったが、こうして大好きなケーキに囲まれる仕事に就けたのだから結果的にはよかったのかもしれない。

転職の大きな理由は、失恋だ。

五年もつきあった恋人に浮気相手が妊娠したからと、一方的に別れを切りだされたのがそもそものはじまりである。しかも二人とも会社の同僚だったこともあり、陽咲は元恋人とつきあっていることを隠してはいなかったため、彼らが上司に結婚の報告をおこなったことで全社員の知るところとなってしまった。

――あれは正直、キツかった。

仲のいい同僚は陽咲を慰めてくれたが、社員のなかには元恋人や浮気相手と親しい人間もいる。心労に加えて、人間関係でも気を遣う毎日が続き、精神的に参ってしまった陽咲は、仕事に影響がではじめたことをきっかけに長年勤めた会社を辞めたのである。

「――ねぇ、お姉さん。このレイアウトどうかな？」

思い出にひたっていると、可愛らしい声がした。陽咲と同じ接客担当の来栖結が、焼き菓子専用の棚を指している。色とりどりの包装紙に包まれた、クッキーやマドレーヌ、フィナンシェといった、定番の焼き菓子がずらりと並べられている。つい先週までは、バレンタイン用の装飾に彩られていた店内も、いまは普段通りの光景だ。

「どっちでもいいと思うけど」

「それね、一緒に買い物に来た彼氏に一番言われたくない台詞だよ」

「私は結君の彼氏じゃないからいいの」
「もう、訊かれたんだからちゃんと感想を言ってよね」
腰に手を当て、結は不満げに陽咲を見つめる。洋菓子店アルセーヌの正式な制服は、陽咲が着ている、膝下丈の黒いワンピースに白いフリルつきのエプロン、それに頭を覆う白い三角巾だ。
一方、結の格好は、ミニスカートと言っても過言ではないくらい詰められた丈に、よりフリル感が強調されたエプロン。それに黒いニーハイソックスをあわせ、ポニーテールにした頭には、三角巾の代わりに白いレースのカチューシャをはめている。本人曰く、もとの制服は可愛くないので改造したらしい。ぱっちりとした大きな瞳と、桜貝のように愛らしい唇。美少女といっても差し支えのない結には、とてもよく似合っていた。
――これで男の子なんだよねぇ……。
現役の男子高校生である結の趣味は、女装である。初対面の際は思わず声をあげてしまうくらい驚いたが、見慣れると女装していないときのほうが違和感を覚えてしまうくらいだ。百六十七センチの陽咲よりも小柄で、くるくるとよく動きまわる姿はハムスターを彷彿させる。毒舌で、たまに心をえぐってくることを除けば、歳の離れた

弟のような存在だった。

「じゃあ、もう一、二個くらい減らしたほうがいいんじゃないかな。遠目からだと、少し窮屈そうだから」

「そうそう、そういうアドバイスを求めてたんだよ」

ニコニコしながら、結は個数が多かったクッキーとマドレーヌの袋を一つずつ取り除いた。そして、陽咲をふり返ったかと思うと、なぜか小首を傾げる。

「んん？　お姉さん、ちょっと太った？」

「それも恋人に言ったら怒られる台詞ね」

「ボクはお姉さんの彼氏じゃないしー。意地悪で言ってるわけじゃないよ。ほんとにアゴのラインがさぁ――」

結に見せつけるように拳を握れば、「あ、オーナーに用事があったんだー」と言ってそそくさと厨房に行ってしまった。

「アゴのライン……」

まだ来客がないことを確認して、陽咲はチラッと窓ガラスに映る自分をチェックした。そこには切れ長の目をさらに細めた、自分の顔が映っている。怒っているわけでもないのに、よく「怒ってる？」と訊かれる原因。つりあがり気味のキツネ目は、陽

咲にとって子供の頃からのコンプレックスの一つでもある。

指摘されたアゴのラインをにらむように見つめ、「……気のせいよね」と陽咲はつぶやいた。閉店後、毎日のように残ったケーキを持ち帰っているため、そんなことはないと否定できないのが辛いところだ。

気のせい、気のせい、と心のなかで呪文のように唱えていると、厨房からコックコート姿の男性――焼き菓子担当のパティシエ、近藤哲志が顔をだした。

「陽咲さん。ちょっといいかな」

「どうかしましたか？」

「これなんだが……」

二メートルはありそうな大柄な体を曲げた哲志は、皿に盛られたピンク色のマカロンを陽咲の鼻先に近づけてくる。甘酸っぱい香りがふわりと香った。

「フランボワーズですね」

哲志はうれしそうに、「正解だ」と言って頷いた。厳つい顔立ちのせいで、笑っているのに笑っているようには見えないところが、とても親近感を覚える。パティシエになるまえは要人警護官の職に就いていたそうで、怪我が原因で引退したあとも体は鍛えているらしい。ボディビルダーのような筋肉のせいで、コックコートがいまにも

はち切れてしまいそうだ。年齢は四十歳。ただし外見とは裏腹にその性格は温和で、唯一の女性職員である陽咲をいつも気遣ってくれる好人物である。

「休憩時間に更衣室に置いておくから、味見をよろしくね」

「……はい」

いつもなら喜んで即答するところだが、陽咲は一拍まを置いて頷いた。ここ一週間ほど、毎日のようにマカロン責めに遭っているのが原因だ。

理由は約一月後に控えたホワイトデーだった。

主力商品がマカロンに決まってから、焼き菓子担当の哲志は、仕事の合間を見つけては試作品作りにはげんでいた。

はじめは喜んで味見役を務めていたが、さすがにかなりの頻度で提供されるマカロンに食傷気味にならざるをえなかった。しかし、毎日遅くまで居残って試作品作りにせいをだす哲志に、「もうむりです」とは言いづらいものがある。

それに、哲志には納得のいくものを作ってもらいたかった。そのための協力なら惜しむつもりはない。そう、たとえアゴのラインがふくよかになったと言われても――。

「フランボワーズもいいと思いますよ。ベリー系は女性に人気がありますから」

「……そうだね」

おっと失言だった、と陽咲は口を噤んだ。哲志は五種類のマカロンを作ろうとしているのだが、いまいちその味が絞り込めないらしい。定番のプレーンにはじまり、シヨコラ、抹茶、イチゴにピスタチオ、変わり種でメロンや黒ごまなど、試行錯誤を繰り返している。そして、たったいま、陽咲の一言で新たにフランボワーズが加わった。

「あ、でも、三月に入ったらホワイトデーの予約をはじめたいんで、がんばってください」

「……あ、ああ」

一瞬、哲志は顔を引きつらせ、硬い声で頷くなり厨房に引っ込んでしまった。これはまたマカロンが量産されそうだな、と陽咲は苦笑する。しかし、猶予がないのは事実だ。哲志には言っていないが、すでにホワイトデー用のチラシはほぼできあがっており、あとはマカロンの写真と詳細を書き込むだけとなっている。

「哲志さんも、もう少し自信を持てばいいのに」

洋菓子店の主力商品はもちろんケーキだが、哲志が担当する焼き菓子もリピーターがつくほどの人気商品でもあるのだ。贈答用に箱に詰めてほしいと、注文してくる客も珍しくはない。

「お姉さん、また冷蔵庫にマカロンがあったー」

厨房から戻って来た結は、げんなりした様子で溜息をついた。マカロン責めに遭っているのは、結も同じである。厨房には聞こえない程度の音量で愚痴を言うだけ、まだマシだろう。

「今日はフランボワーズだって」

「ううう。あんな山盛り、完食できるかなぁ……」

「ホワイトデーまでの辛抱よ。それにマカロンなんて、普通は高くてなかなか食べられないんだから。むしろ、ありがたいと思わないと」

「お姉さんて単純だよね。だからアゴが丸くなっちゃうんだよ」

「まだ言うか」

そのスベスベの頬をツネってやろうと手をのばすがあと少しのところで来客を報せる鈴が鳴ったので断念せざるをえなかった。

閉店後、陽咲は更衣室で一人、ノートパソコンの画面を覗き込んでいた。更衣室には四人がけのテーブルとパイプ椅子、それに壁際に四人分のロッカーが設置してある。更衣室というだけでなく、休憩室としても活用されている部屋だ。

パソコンの画面には、一ヶ月分の売りあげをまとめた表が映しだされていた。オープンして一年ちょっとの個人経営の店にしては、なかなか優秀な数字ではないだろうか。とは言え、繁盛店と呼べるほどではない。ここからいかにして売りあげをのばすかが重要課題だ。

陽咲はパイプ椅子の背に体重をかけ、両手を天井にむけてぐっと背をのばした。パキパキと節が鳴る。

「立地はいいんだから、あとは知名度か……」

アルセーヌは三階建てのビルの一階に店舗を構えていた。目のまえの道路を挟んで、五メートルくらいの幅の川が流れており、その川沿いに植えられた桜の木は、観光客だけでなく近所の人も思わず足を止めてしまうほど美しい。そのため幅のある歩道が整備されており、季節にかぎらず人通りも少なくなかった。

「……オーナーの顔だしが、一番なんだけどなぁ」

つぶやいた瞬間、更衣室のドアがノックされた。「どうぞ」と返事をすると、ドアが開いて、いままさに脳裏に思い描いていた洋菓子店のオーナー兼パティシエでもある、一条大空が入って来た。

「まだ帰ってなかったのか」

眉を寄せるようにしてこちらを見下ろす大空を、陽咲はパイプ椅子に座ったまま見あげた。

鼻筋の通った彫りの深い顔立ちに、エメラルドのような美しい瞳。コックコートからのびた手足はすらりと長く、身長も近藤ほどではないが百八十センチはあるだろう。今日は前髪をあげ、ペイズリー柄のバンダナで頭を覆っていた。そのせいで、整った顔がより際立って見える。年齢は陽咲よりも六つしたの二十四歳。

大空が頻繁に店頭に顔をだせば、女性の集客数があがりそうなものだが、本人は顔で売ったと言われるのが嫌で、客がいるあいだは絶対に厨房からでようとはしなかった。

「売上表を見てたの。一日中、雨が降ってた日は、売りあげがガクンと落ちてるなって」

「うちだけじゃないぞ。それはこの業界で、昔からずっと経営者の頭を悩ませてきた問題だ」

「雨の日は寄り道しないで、はやく帰りたいって気持ちはわかるんだけどね」

どうしてもケーキを買わなければという必要があれば話は別だが、酷い雨の日にわざわざケーキを買いにいこうと思う客は少ない。雨の日でも集客に繋がるなにかがあ

ればいいのだが……。

「あ、そうだ。雨の日限定で、千円以上ご購入の方は、お好きなケーキを一つプレゼント、っていう企画はどう？」

脳裏に浮かんだ案を、陽咲はそのまま口にした。この手のサービスを行っている飲食店はわりと多いだろう。洋菓子店にかぎらず、雨の日はどの飲食店も客足が遠のいてしまうものだ。

「降水確率八十パーセント以上の日限定〟って条件をつければ、そう頻繁に行わなくてもいいし。告知はホームページでするとして――」

「試しにやってみるのもいいかもな」

単なる思いつきだったのだが、意外にも大空が食いついてきた。思いがけず採用となった陽咲は、驚きつつもすぐに頭を切り替える。

「じゃあ、プレゼン用の資料を作るね」

「そこまでしなくていい。近藤や結も反対はしないだろ」

「でも、ルールをまとめたいんで、資料は作りたいかも」

一般的な企業なら、まずは資料を作成してからプレゼンテーションというのが普通の流れだ。しかし、ここは個人経営の店なので、基本的には大空の許可さえあれば問

題ないというスタンスである。
「あんたの好きなようにしてくれ」
「……了解しました」
さほど成果がでなくても、大空は怒ったりはしないだろうが、それとこれとは話が別だ。やるからには、一定の成果をださなければ。まずはコストの計算だ。ケーキを一つタダにするので、当然、一日の売りあげはさがってしまう。その損失を補うためには、どれだけ売りあげが必要なのか。考えることは山ほどある。
「まあ、頑張るのもほどほどにな」
そう言って、大空は陽咲の頭をぽんと叩いた。何気ない接触に、思わず心臓が小さく跳ねる。
――本当にこういうことは心臓に悪いので止めてもらいたい。
心の奥底に押し込めた想いが、うっかりはみだしそうになってしまうではないか、と陽咲は心のなかで唸った。
むろん陽咲自身、望みのない想いだとわかっている。こちらから積極的にアピールするつもりはないし、そのまま知らぬふりをしていれば、芽生えはじめた想いも枯れてくれるだろう。

胸を押さえて衝動をやりすごしていると、厨房からこちらに走って来る足音が聞こえた。

「失礼するよ。ああ、大空君。いまお客さんから電話がきてるんだけど、代わってくれるかな。私は手が離せなくて」

「わかった」

大空が返事をするよりもさきに、哲志は「すまないね」と言って慌ただしく厨房へと戻って行ってしまった。電話だったら自分が、と腰を浮かせた陽咲だったが、「あんたは、さっさとそれを終わらせろ」と、大空に押し留められてしまった。

時刻は午後八時。洋菓子店をでて最寄りの駅から自宅までは、だいたい三十分ほどかかる。そこから夕食をとって、となると、ベッドに入る頃にはだいぶ遅くなっていることだろう。大空の言う通り、できるだけはやめに切りあげなければ、と陽咲はパソコンにむきなおった。

「まずは、いらなくなった情報を消して、と」

陽咲が就職した当時、洋菓子店のホームページはそこまで手がまわらなかったこともあり、ほとんど手つかずの状態だった。いまはトップページにお薦めのケーキや焼き菓子の画像がアップされ、それぞれのページも増えた。トップ画面に表示される、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。